

2021年11月4日  
NHK広報局

## 11月会長定例記者会見

Q. 衆院選に関する放送・サービスの総括について。

A.(前田会長)はじめに10月31日に行われました第49回衆議院選挙についてお話しさせていただきます。NHKでは、各党の政策や争点など投票の判断材料となる情報を公平・公正に提供するとともに、開票状況や政局の動きなどを正確・迅速にお伝えする方針で臨みました。事前の選挙報道では、放送やインターネットで各党の政策や選挙の争点、有権者の関心などを多角的に提供しました。例えば、衆議院選挙では初めて、インターネットの特設サイトに全選挙区の候補者に同じ質問をしたアンケートを掲載し、判断材料の一つとしていただけだと思います。投開票日には、大河ドラマを繰り上げて、午後7時55分から開票速報をお伝えし、最後の当選者まで正確に伝えることができました。開票速報では、バーチャル技術を使った演出をさらに進化させ、議席予測や各地の出口調査の結果を分かりやすく紹介しました。また、もう一つの新しい取り組みとして選挙と同時に行われた最高裁判所裁判官の国民審査に関して、NHKオンラインに特設サイトを設けました。裁判官のプロフィールや主な裁判での判断などを紹介し、多くの方にご覧いただきました。新型コロナウイルスの感染が続くなかでの初めての衆議院選挙で、出口調査の感染防止対策の徹底など、これまでにない対応もありましたが、全局体制で取り組み、人々の関心にこたえる選挙報道ができたと考えています。

Q.今回は議席予測が難しかったようだが、今後の課題は。

A.(正籬副会長)出口調査に基づく議席予測については、今回の結果を真摯に受けとめて、しっかりと検証し、改善に結び付けたいと思っています。わたしも長年選挙報道に携わってきましたが、出口調査と選挙結果がそのまま結び付くというのではなく、きちんとした分析が必要であり、常に改善に取り組まなければ正確な議席予測にはつながっていきません。結果を真摯に受け止め、しっかりと検証し、改善策を検討していきたいと思っています。

Q.「NHK杯国際フィギュアスケート」について。

A.(会長) 続いて「NHK杯国際フィギュアスケート」についてです。毎

年、多くのフィギュアスケートファンの皆さまに楽しみにしていただいているこの大会ですが、今年は11月12日から14日までの3日間、東京・代々木第一体育館で開かれます。来年2月の北京オリンピックを目前に控えた時期での開催となりますので、オリンピックでの戦いを見据えた国内外のトップスケーターたちの熱戦をご覧ください。そして、このNHK杯にあわせて、ウィンタースポーツの放送・サービスを盛り上げる、新しい「NHKウィンタースポーツテーマソング」が完成しました。昨年引き続き、新型コロナの感染防止対策を徹底しながら、総合テレビなどで競技の様様をお伝えします。詳しくは担当者から説明します。

A.(担当者)NHK杯は、国際スケート連盟公認のグランプリシリーズの日本大会として開催され、世界各国のトップ選手が出場する大会となっています。昨年は新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、出場選手は開催国の選手などに限られましたが、今年はバブル方式での徹底した感染対策をとりながら、世界各国の有力選手が出場します。大会では、男子シングル、女子シングル、アイスダンス、ペアの4つの種目が行われます。男子シングルには、ピョンチャンオリンピック銀メダルの宇野昌磨選手が出場します。女子シングルには坂本花織選手のほか、海外からも北京オリンピックのメダル候補にあげられる選手が出場します。アイスダンスには、昨年に続き、バンクーバーオリンピック男子シングルの銅メダリスト、高橋大輔選手が、村元哉中選手とのカップルで出場します。また、ペアには先月のグランプリシリーズアメリカ大会で、日本人ペアとして初めて2位に入るなど、成長著しい三浦璃来選手、木原龍一選手のペアが出場します。今回の大会は、会場の収容人数の50%にあたる6000人ほどの観客を入れての開催となりますが、中継にあたって十分な対策を取って感染防止に万全を期します。放送は総合テレビとBS1、そしてBS8Kで、すべての種目を生中継します。このほか、インターネットの特設サイトやNHKスポーツのツイッターで、選手のインタビューやハイライト動画などを楽しんでいただけるように準備を進めています。また、競技の進行に合わせて、各選手の演技構成の変更や得点をリアルタイムで更新するライブスコアのサービスもご利用いただけます。会長からもありましたが、今年のNHK杯は、北京オリンピックをおよそ3か月後に控えた時期での開催です。代表選考や、その先のオリンピックでの戦いを見据えて、またコロナ禍の様々な制約を乗り越えてきた選手たちが、どのような演技を見せてくれるか、注目してご覧いただければと思います。新しい「NHKウィンタースポーツ

「Fly High」は、シンガーソングライターのmiletさんが歌う「Fly High」です。この曲は、NHK杯フィギュアの大会初日となる11月12日の放送で初めて披露する予定です。NHKでは、miletさんのこの曲とともに、ウィンタースポーツを盛り上げていきたいと思ひます。

Q.この楽曲は北京五輪のテーマソングとしても使用されるのか。

A.(担当者) この曲はあくまでも「NHK ウィンタースポーツテーマソング」ということで、オリンピックに限らずさまざまなウィンタースポーツの中継等で使用させていただきます。オリンピックも含めて未永く使っていきたいと思ひています。

Q.2021年度「NHK歳末たすけあい・海外たすけあい」について。

A.(会長)「NHK歳末たすけあい」「NHK海外たすけあい」についてご説明いたします。歳末たすけあいは、新型コロナで不安を抱える方や国内の福祉施設など、支援を必要とする方のために 中央共同募金会を通じて使われます。また海外たすけあいは、世界各地でコロナや紛争、自然災害などに苦しむ人々のために、日本赤十字社を通じて使われます。受付の期間は12月1日から25日までです。各放送局の受け付け窓口では、それぞれの都道府県の感染状況を考慮しながら対応してまいります。みなさまから寄せられた募金が、どのように役立てられるかは、関連番組の「あなたのやさしさを2021」で国内や海外の事例を紹介してお伝えします。また、2022年大河ドラマ「鎌倉殿の13人」に出演する山本耕史さんや、連続テレビ小説「カムカムエヴリバディ」出演の川栄李奈さんに、NHKのさまざまなメディアを通じて「たすけあい」へのご協力を呼びかけていただきます。去年は、新型コロナの感染が拡大する中でしたが、歳末・海外ともに前の年を上回り、合わせて14億円近くの寄付をお寄せいただきました。今年も皆さまのご協力をよろしくお願ひいたします。

Q.インターネット配信の社会実証について、具体的な内容は。

A.(担当者)基本的な方向性としては、NHKプラスに加えて、NHK NEWS WEB、NHKオンライン等でも情報を発信していますので、それらをどのような形で組み合わせしていくか検討しているという段階です。準備としてはまだ初めの段階で、これから内容を詰めていきたいと思ひます。来年1月に来年度のインターネット活用業務実施計画を公表する際には、詳しい内容をお知らせできるようにしたいと思ひます。

ています。

Q.「おかえりモネ」の総括と、「カムカムエヴリバディ」への期待は。

A.(会長)「おかえりモネ」については、まずは番組をご覧いただき、応援いただいた皆さまに感謝を申し上げます。今年は東日本大震災から10年で、東北を舞台に、気象予報士のヒロインの成長を通じて、人と自然のつながりや地域で生きることを意味を問いかけたドラマだったと感じています。新型コロナウイルスの影響で困難な状況での制作となりましたが、出演者、スタッフの粘り強さで予定通り放送を終えることができました。また従来とちょっと違った演出で、工夫されていたと思います。新しく始まった「カムカムエヴリバディ」は、100年前に日本で初めてラジオ放送が行われた日に生まれたヒロインということで、ヒロインが3代にわたります。またラジオ放送というのは私の年代からするととても懐かしく、改めてラジオの持つ特性を、テレビとは違った意味で感じるができます。まったく違った味のドラマになると思いますので、ぜひ皆さんにご覧いただきたいと思います。

Q.朝ドラについては、視聴者の視聴習慣も変わってきているようだが。

A.(会長)生活時間帯も変わってきていますので、昔のまま、「この時間にこれをはめるとピッタリだ」ということはないと感じています。また今回のように、震災を扱ってかなり深刻な部分もあると、「朝から放送するのか」と言われることもありますし、一方でただ明るくすれば良いということでもないのです。いろいろなことを試してみるということだと思います。あまりワンパターンで、「朝ドラはこういうものだ」と決めつけられない方が良くと思いますし、最終的には視聴者の方々にご判断いただくことです。またNHKプラスでも見られますので、そういう意味でも昔とは違った形になってきたと思います。

Q.「おかえりモネ」はNHKプラスの見逃し配信でもよく見られたが。

A.(会長)NHKプラスは、見逃しの機能を活用される方が多いですね。時間に拘束されず、スポーツなどと違って結果がいきなり出るわけでもありませんので、私も半分くらいはNHKプラスで見ました。移動しながら見ることもありますので、機能的には見逃しの部分がかかなり効いたのではないかと思います。ただNHKプラスの手続きの方法は相変わらず複雑で、皆さんからのご要望も多いので、もう少しすんなり登録できるようにしたいと思っています。

Q.紅白歌合戦について、「カラフル」というテーマが発表されたが。

A.(担当者)テーマについては、何となく色を失ったこの 2021 年に、改めて紅白歌合戦を通じて色とりどりの気持ちを取り戻していただきたいという思いをこめて、歌をお届けしたいということです。またオリンピック・パラリンピックで心に残った多様性を認め合う大切さについても表現したいということで、「カラフル」というテーマを今年の紅白の目標とさせていただきます。決まっているのは司会、テーマのみで、出場者については検討中です。

Q.今回、紅組司会、白組司会、総合司会を置かない狙いは。

A.(担当者)テーマを全体的に演出していくうえで、今回の形がベストだと考えました。紅組、白組の隔てなく応援、紹介していただくことで、「カラフル」というテーマを皆さんにお届けできると確信しています。

Q.紅組が女性、白組が男性という枠組みを変えることも検討するのか。

A.(担当者)70 年以上にわたって積み重ねてきた形式の一つであり、それも大切にしながら、テーマに掲げた「カラフル」を達成するため、全体の構成や演出、男女の枠をこえた企画などについても検討しています。今後も、さまざまな検討を重ねて紅白そのものが進化していくべきだと思っています。

Q.観覧募集について、放送受信契約 1 件につき 1 回の申し込みとしたのはなぜか。

A.(担当者)はがきで募集していた際には、一人の方がたくさん応募されていたこともあったと思いますが、今回は「なるべく多くの方に機会を」ということで、ウェブで、1 契約あたり 1 回の応募ということにさせていただきました。

Q. 関東1都6県での視聴調査実験について、結果をどう利用するのか。

A.(担当者)11 月 2 日に発表させていただいたが、関東 1 都 6 県で総合テレビと E テレの視聴状況を調査し、番組編成の検討や番組制作の改善などに活用することを目的としています。

Q.データの取得にあたり視聴者に事前に同意を取らないのはなぜか。結果は公表するのか。

A.(担当者)視聴者情報の取得にあたっては、総務省が定める放送受信者等の個人情報保護に関するガイドラインで、事前の同意を取るとは義務付けられていません。また今回の実験で取得する視聴者情報自体には、特定の個人を識別できる情報は含まれていないというえ、NHK

としても特定の個人を識別できない状態で管理します。そうしたことも踏まえ、今回は事前の同意は取らずに行わせていただきます。結果については、今回の調査は視聴状況の把握のため NHK が独自で行うもので、現段階で発表する予定はありません。より多くのデータを集めるため、ホームページや放送でのスポット、データ放送でも、「こういう形で情報を集めさせていただいている」という周知をこころがけています。

Q.来年4月からのコンテンツ強化を目指すとしていることについて。

A.(副会長)来年4月から「NHKが変わった」と思っていただけのように、多くの方々の心に刺さり、心を揺さぶり、役に立つ番組を出せるようにしたいと思っています。いま一つ一つ開発番組を放送して、その見られ方、どこが足りていてどこが足りていないのか、どういう形で来年度の新番組に生かせるのかを検証している段階です。コンテンツの強化というのは、視聴者の方々にどれだけ受信料に見合う価値を還元できるかに尽きると思います。究極の目標は、来年4月に視聴者の方々に受け入れられる、お役に立つニュースや番組等を作れるかどうかということで、一つ一つ段取りを確認しながら進んでいこうということです。

Q.来年4月の番組改定に向けて大きな改革になるのか。

A.(副会長)コンテンツを強化するには、それを作る人たちの配置、体制もかかわってきます。今までのように番組がたくさんあるなかで、ほかの新番組開発に向ける余力も出てこないような状況では、良い番組を開発することはできません。限られた経営資源のなかで体制も含めて考えていかなければならず、組織改革も含め一つ一つ確認してやっていくことは重要だと思っています。若い人も含め、いろいろな能力や価値観を持った人が作ることで良いものができるという側面もあるので、組織、番組の作り方、コンテンツそのものももちろんですが、デジタル展開やリアルな視聴者コミュニケーションも含め、総合的に考えていこうと思っています。

Q.コンテンツ強化への手応えについて、会長はどう感じているのか。

A.(会長)私は外から来ていますので、感想ということで申し上げますと、NHK でいろいろな番組を作る方々は、良いものを作って長続きさせたいという願望が非常に強いのですが、これが強すぎると、新しい番組を企画して日の目を見るのにものすごいエネルギーが必要になります。完成した番組と比べると、新しく作ったものにはケチを付けよう

と思えばいくらでも付けられますので、そうすると、いつまでたっても長寿番組だけが残って、新しい番組が開発されないことになります。ですので、今回、地方からいろいろなアイデアをいただきましたが、あまり入口のところで厳しくしすぎないようにということを私から注文しました。1000本のうち1本しか成功しないなどとなると、誰も作る気がなくなり、せっかくの若い芽をつむことになります。若い人が作ったものがすべて良いかということそれはまた別なのですが、感性がまったく違いますので、ベテランと言われる方だけの意見では永遠に新しいものはできません。非常に矛盾していますが、これをやらないとマンネリになってしまいます。マンネリになるということは固定のファンができるということ、それはそれで良いことですが、それをずっとやり続けると、固定ファンだけで、残りの人たちのリクエストに答えていないことになります。作り方もいろいろ工夫をしないと、今まで通りの同じやり方ではいけませんし、そういう意味では、制作の仕方、工程管理の仕方など、できる限り一度「見える化」したらどうかということです。それぞれプロの職人技が個人の頭の中に全部入ってしまっていて、「見える化」しないと、組織として後継者に引継ぎができませんので、組織全体で効率を良くしていく方向にしてほしいと思っています。非常に難しいが、これをやらないと生産性は上がらないと思います。

Q.一般社団法人「放送人の会」が、経営計画について、BS波の整理・削減への反対などの意見を発表した。

A.(会長)そういう考え方もあると思いますが、限られた受信料のなかでいかにクオリティーを上げて番組を作るかがたいへん重要で、単純に波を減らすことが目的ではありません。今の状態で人手が限られるなかクオリティーを維持できるのかというのが、今回の中期経営計画の原点であり、少し波を整理したうえでクオリティーを下げない形で番組を提供していきたいということです。ご意見そのものは、私もその通りだと思うところではありますが、合理化のための合理化をやっているわけではありませんので、ご理解をいただきたいと思います。良い番組を作りたいということはまったく同じです。ただ作り方についてはいろいろと研究、工夫する必要があります。また受信料についても、大変きつい経営判断ですが、プラスが出たときは受信料を値下げする形でお返しすることにしており、ご理解いただきたいと思います。クオリティーが落ちたということであれば、ぜひご指摘をいただきたいと思

います。

Q.先方は、NHK 側と議論の場を持ちたいようだが。

A.(会長)これは交渉事ではなく、我々、作る側の責任ですので、そういうことで解決する問題ではないと思います。貴重なご意見として承ります。

Q.日本ハムの新庄新監督について。

A.(会長)すみません、私はジャイアンツファンなものですから。ただ新庄監督には頑張っていたきたいと思います。

(以上)